

課題：BUBBLE

コロナ危機の時代に、私たちは多くの新しい言葉や概念を見聞きした。Bubble バブルも、そのなかのひとつである。それは、閉鎖環境を人工的に作り出し、その内・外部のあいだの交通を制限することで、感染がバブル内から外部へ、あるいはその逆へと広がることを防ぐことを意味する。

たとえば東京オリンピック 2020（開催は 2021 年）、北京冬季オリンピック 2022 はその概念を取り入れて開催された。選手や関係者はバブル内のみで生活し、競技も行う。これらは無観客で行われたが、限られた数の観客をバブル内に閉じ込めれば、歓声がこだまするオリンピックも論理的には可能であったはずだ。

このバブルを、建築的想像力とともに、北海道につくり出してみよう。

手順は次のとおりである。

1. 北海道内の、象徴的なあるいは魅力的な場所をひとつ選ぶ。バブルはその場所を中心につくられる。**その場所を選んだ理由を視覚的に表現する。**
2. バブルの閉鎖性は、道路を封鎖して検問所を設けるなどの平面的な区画のみで作りにしてもよいし、ドーム（例えばバックミンスターフラー Dome Over Manhattan, 1960 のような）などで作り出してよい。この**閉鎖のしかたを設計する。**
3. バブル内で行われるイベントを想定する。オリンピックがそうであったように、そのイベントはそもそもこのバブルを必要とする理由である。ここではイベントは、スポーツ（例えば直線道路を利用した 100 メートル走や、川を利用したボート競技など）、パフォーマンス・アート（ダンスや演劇、映画撮影、プロジェクション・マッピングなど）、フェスティバルなどが考えられるだろう。この**イベントのための施設（永続的であってもいいし、テンポラリーなものであってもよい）を設計する**
4. バブル内に入るものは、イベントの当事者、観客、医療関係者、および生活サービス提供者である。
5. バブル内に入るものは、最短でも 2 週間はバブル内にとどまらなければならない。したがって、バブル内には、3 で想定するイベントのための施設のほか、宿泊、食事、そして簡易な医療検査のための空間を必要とする。こうした**生活空間を既存の施設を利用するなどして表現する（新たに設計してもよい）。**
6. 観客はその短くはない期間、いったい何をするのかを考える必要がある。（たとえばスポーツ競技が行われていない時間帯は、観客もそのスポーツを学び楽しむことができるかもしれない。あるいは、ダンスや演劇などはワークショップ型／観客参加型で行われるかもしれない）。こうした**時間と使用例を視覚的に表現する。**
7. バブル内の空間は、その期間中は外部から独立したひとつの世界となるだろう。**魅力的な世界を構想せよ。**

出題者：鈴木隆之 北海道科学大学客員教授

- 対象： 北海道科学大学建築学科学部、大学院学生（4 年意匠系ゼミ学生は必修/建築ラボセミナー）、
学外建築学生有志
- 提出物： 構想の表現に必要と考える図面、模型写真、透視図、図式、言葉を A1 一枚にレイアウトした
図面 PDF データ
- 提出要領詳細： 後日、応募登録者に連絡

課題講評審査日程：2022 年 9 月中旬（詳細判明次第登録者に通知）

- 作品講評審査： 竹山聖 北海道科学大学客員教授、京都大学名誉教授
鈴木隆之 北海道科学大学客員教授、武漢大学都市建築学科教授

オブザーバー： 川人洋志、岩澤浩一（北海道科学大学工学部建築学科教員）

応募登録及び作品提出日程：応募登録 2022 年 7 月 1 日午後 5 時締め切り、

作品提出日時：2022 年 9 月上旬を予定。詳細は、後日、応募登録者に連絡。

応募登録： 下記 Google Form 様式に必要事項を入力。

<https://forms.gle/te8JwKu2a26bD47C9>

講評審査会場： 後日応募者に連絡を行う。

顕彰： 2022 年 11 月 26 日に予定する北海道科学大学建築学科創立 50 周年記念祝賀会にて優秀作品の顕彰を行う。
顕彰作品数、顕彰賞品についての詳細は、後日、応募登録者に連絡。

問合せ： 川人 (E-Mail:kawahito@hus.ac.jp)